

「聖霊に導かれる証人」
使徒の働き 11 章 19-26 節

○ 聖 書

19 さて、ステパノのことから起こった迫害により散らされた人々は、フェニキア、キプロス、アンティオキアまで進んで行ったが、ユダヤ人以外の人には、だれにもみことばを語らなかった。
20 ところが、彼らの中にキプロス人とクレネ人が何人かいて、アンティオキアに来ると、ギリシア語を話す人たちにも語りかけ、主イエスの福音を宣べ伝えた。
21 そして、主の御手が彼らとともにあったので、大勢の人が信じて主に立ち返った。
22 この知らせがエルサレムにある教会の耳に入ったので、彼らはバルナバをアンティオキアに遣わした。
23 バルナバはそこに到着し、神の恵みを見て喜んだ。そして、心を堅く保っていつも主にとどまっているようにと、皆を励ました。
24 彼は立派な人物で、聖霊と信仰に満ちている人であった。こうして、大勢の人たちが主に導かれた。
25 それから、バルナバはサウロを捜しにタルソに行き、
26 彼を見つけて、アンティオキアに連れて来た。彼らは、まる一年の間教会に集い、大勢の人たちを教えた。弟子たちは、アンティオキアで初めて、キリスト者と呼ばれるようになった。

今朝は、初代教会の歴史における一つの大きな転換点、アンティオキア教会から学びたいと思います。使徒の働き 8 章には、ステパノの殉教をきっかけに教会への迫害が起こり、人々が各地へ散らされていったことが記されています。しかし神様は、その迫害による離散をむしろ用いて、福音を各地へと広げていかれました。それが 8 章から 11 章前半にかけて記されている流れです。そして、アンティオキアにおいて、ひととき大きな転換が起こります。異邦人の教会が誕生するので

19 節を見ると、迫害で散らされた人々はフェニキア、キプロス、アンティオキアへと進んで行きましたが、そこでもまだユダヤ人以外には誰にもみことばを語りませんでした。この直前、11 章前半では、エルサレム教会が異邦人への宣教を主のみこころとして受け止め、心を決めたことが記されています。けれども、この時点ではまだ、福音が本格的に異邦人へと向けられてはいなかったのです。ここで心に留めておきたいのは、福音宣教の広がり、教会の周到な計画や戦略から始まったのではないということです。むしろそれは、人の目には決して喜ばしいとは言えない迫害という出来事の中から、開かれていきました。

20 節は「ところが」ということばから始まります。この一言からも分かるように、それまで誰も予想していなかったことが、ここで起こったのです。彼らの中にいたキプロス人やクレネ人が、アンティオキアに来ると、異邦人たちにも語りかけ、主イエスの福音を宣べ伝えました。この壁を打ち破ったのは、教会の指導者たちではありません。名前すら記されていない、無名の人々でした。神様のみわざは、しばしばこのように、目立たない人、けれども主のみこころを求めて歩む人を通して前進していくのだと思います。

異邦人に福音を語ったこのキプロス人やクレネ人たちは、エルサレム教会から「行って語りなさい」と命じられたわけではありません。彼ら自身の決心と勇気によって、語り始めたのです。長年の慣習や、それを乗り越えることへのためらいを超えていく、主への信仰と勇気が彼らにはあったのでしょう。詳しくは後ほど改めて考えたいと思いますが、私は、彼らが聖霊に満たされていたのだと受け止めています。聖霊に満たされていたからこそ、長く自分たちを縛っていた価値観や人間の枠組みを打ち破り、前へと踏み出すことができたのです。そして、彼らの宣教を通して、大勢の人が信じ、主に立ち返りました。

しかし、大勢の人が信じたのは、本質的には彼らの功績ではありません。21 節には、主の御手が彼らの働きとともにあったからだ、と、はっきり記されています。ここには二つのことが同時に示されていると思います。一つは、人が信仰による勇気をもって、実際に一步を踏み出したということです。もう一つは、その一步を受け止め、実を結ばせてくださる神様の御手が働いたということです。神がすべてを支配しておられるのだから人は何もしなくてよい、ということではありません。「これを神様は求めておられる」という促しが心にあるのなら、勇気を出して一步を踏み出すことが大切なのです。そしてその結果は、神様ご自身が明らかにしてください。時には、それが実は自分自身の思いにすぎなかったと、後になって示されることもあるでしょう。そうであるなら、その実を静かに受け止め、刈り取る謙虚さもまた、求められているのだと思います。

アンティオキアで多くの異邦人が主に立ち返っているという出来事は、やがてエルサレムの教会の耳にも届くほどの、大きなうねりとなっていました。それを知ったエルサレム教会は、バルナバをアンティオキアへと遣わします。バルナバはキプロス出身のレビ人で、現地の言葉にも通じており、まさに適任者であったと考えられます。エルサレム教会がよく考え抜いた上で、このバルナバを送り出したことがうかがえます。

23 節にあるように、バルナバはアンティオキアに到着すると、神の恵みを見て喜びました。ここで「恵み」ということばについて、少し立ち止まって考えてみたいと思います。恵みとは、無償で与えられるものです。そしてこれは、まさしく神の恵みでした。アンティオキアにおいて、多くの人は、神おひとりしか与えることのできないもの、人の救い、この世で最も価値あるものを受け

取ったのです。しかも、それを受けるにふさわしくない者が、受け取ってしまう。だからこそ、恵みなのです。

もう自分ではどうにもならない、赦されるはずがないと思っていたところに、赦しが差し出された。何一つ差し出せるもののない自分に、それでも手が差し伸べられた。そのような経験です。あの放蕩息子のたとえ話を思い出します。父を捨て、財産を使い果たし、ぼろぼろになって帰ってきた息子に、ありえないことが起こりました。裏切られたはずの父が、遠くからその姿を見つけて走り寄り、「帰ってきた」と喜び抱きしめ、最上の服を着せて祝ったのです。まさにその恵みが、アンティオキアで現実には起こっていました。主の赦しを受け、大きく造り変えられ、救いの喜びに生きる人々が、そこにいたのです。しかも、ユダヤ人だけでなく、異邦人たちにまでも。バルナバはそれを目の当たりにして、大いに喜びました。

そしてバルナバは、心を堅く保っていつも主にとどまっているようにと、皆を励ましました。これはあなたたちが出会った救い主キリストから、今後決して離れることがないようにという勧めです。バルナバはよく知っていたのでしょう。恵みというものは、時として一時的なもので終わってしまうことがあると。だからこそ、彼は皆を励まし続けたのです。

ところで、エルサレム教会によるバルナバの派遣は、実に的確な人選であったと言えます。24節は、バルナバが立派な人物で、聖霊と信仰に満ちている人であったと、その人物像を紹介しています。そして興味深いのは、続くことばです。「こうして、大勢の人たちが主に導かれた」とあります。聖霊と信仰に満ちていることによって人が神へと導かれるのは、よく分かります。しかし同時に、彼の立派な人柄もまた、人を神へと導く一つの側面として語られているのです。ここで「立派」と訳されていることばには、「良い(good, agathos)」という意味があります。周りの人が見て、接していて、あらゆることに善意が感じられる。この人はどこか違う。この人から出てくる言葉は不思議な説得力があって信じられる。一緒にいたい。いったい何がこの人をこうさせているのか、もっと知りたい。そのような興味を人々に抱かせる人物だったのではないかと想像します。

それだけでなく、バルナバはこの後のアンティオキア教会に何が必要なのか、明確なビジョンを持っていました。それは、エルサレムの使徒たちではなく、主から明確に異邦人宣教への召しを受けていたパウロを招き、アンティオキア教会の人々を教え育んでいくということです。

バルナバはサウロを捜しにタルソへと出て行き、彼を見つけ出して、アンティオキアへと連れ帰りました。そうして二人は、まる一年の間、教会に集い、大勢の人たちを教えました。26節にある「まる一年」ということばから、アンティオキア教会が時間を見つけてはともに集まり、みことばに学んでいたこと、そしてこの一年がどれほど密度の濃いものであったかを思い浮かべることができます。この丸一年、アンティオキアの教会はひたすらみことばから学び続けました。神様がどの

ようなお方であるか、イエス様が何を語り、何をなさり、そして今私たちに何を望んでおられるのかを、時間をかけてじっくりと学んでいったのです。

興味深いのは、この丸一年の教えを受けたアンティオキアの人々の姿が、内側からも外側からも、名実ともに変わっていったということです。それは、聖書がアンティオキア教会の人々を呼ぶことばそのものが変わっていることから分かります。26 節にあるように、彼らはここで初めて「弟子」と呼ばれるようになりました。みことばの教えを受けた彼らですが、その教えを人生の中で反芻し続けた結果、彼らは「弟子」へと変えられたのです。

もう一つ、弟子と帰られた彼らに与えられた名前があります。この弟子たちは、初めて「キリスト者、クリスチャン」と呼ばれるようになりました。これは彼ら自身がそう名乗ったものではありません。「そう呼ばれるようになった」のです。第三者の目から見て、周りの人々が「あの人たちはキリストの者たちだ」と言うようになった、ということです。つまり、信仰者としての証しとは、自分で「私は変わりました」と語るのではなく、周りの人が見て、「あの人が変わった」と言わざるを得なくなることなのだと思います。

なぜ彼らは「キリスト者」と呼ばれるようになったのでしょうか。一つには、当時の社会において、ユダヤ人と異邦人が一つの群れとしてともに集うということ自体、常識を超えた出来事だったからです。それは初めて起こった驚くべきことであり、キリストの福音によって起こったのです。そして同時にこの群れには、自分の罪を悔い改め、赦しを受け、大きく造り変えられた人々がいました。キリストに従う彼らの人生が明らかに変わったことが、外の人々の目にもはっきりと分かるようになった。これこそが、彼らを「キリスト者」たらしめたのです。

そしてこの弟子たちの教会、アンティオキア教会は、この後パウロとバルナバを三度の伝道旅行へと送り出す、派遣教会となっていくのです。

○適用

ここまでみことばを見てきましたが、本日の箇所を読みながら思い出す一つのみことばがあります。使徒の働き 1 章 8 節、昇天を前にしたイエス様の、あの約束のことばです。

使徒 1:8 「聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」

聖霊が臨むこと、そしてキリストの証人となること。この二つは、切り離すことができません。聖霊は、人をキリストの証人として生かしてくださるお方だからです。そう考えるなら、アンティオキアで福音を語った、あの名もなき人々、バルナバ、パウロ、そしてアンティオキアの弟子たち

は、まさにこのみことばの成就だったと言えるでしょう。彼らは確かに聖霊に満たされ、導かれて、主の証人として遣わされていった人々だったのです。

ここで私たちは、「聖霊に満たされる」ということを、もう一度考えてみたいと思います。私たちはしばしば、聖霊に満たされると聞くと、何か特別な体験、超常的な出来事を思い浮かべます。もちろん、聖書にはそうした特別な聖霊の働きも記されています。しかし、聖霊の働きは、それだけではありません。実際、今日読んだこの箇所には、炎のような舌が現れたわけでも、異言が語られたわけでも、劇的な奇跡が起きたわけでもありません。そこにあるのは、日常の中で主イエスのことを語り、教えたという、ただそれだけの光景です。派手さも劇的さもありません。その意味で、この箇所は、私たちの日常と驚くほどよく似ているのです。だからこそ、ここに聖霊の働きを見出すことができるなら、私たちの平凡な日常の中にも、同じ聖霊が働いておられることを信じることができるのではないのでしょうか。

では、聖霊に導かれて生きるとは、具体的にどのようなことを指すのでしょうか。それは、何か特別な使命や、目に見える大きな働きを指すではありません。もっと根本的な、私たちの内側で起こる変化のことです。分かりやすく言うなら、聖霊に導かれるとは、神様がなさりたいことが、自分自身のしたいことになっていくということです。それが、聖霊に導かれて生きることの、一つの確かな姿です。

神様が人の救いを願っておられる。だから、自分も人の救いを願うようになる。神様が人を愛しておられる。だから、自分も人を愛したいと思うようになる。神様が福音を伝えることを願っておられる。だから、自分も福音を伝えたいと思うようになる。そうやって、神様の御心が、私自身の願いへと変えられていくのです。

そして、この聖霊に導かれるということは、私たちの側の努力によって実現するものではありません。神様ご自身が、聖霊を与えてくださる。神様ご自身が、私たちを導こうとしておられるのです。これは神様の側の確かな御業です。神様が聖霊を遣わしてくださることは、私たちのその時々気分によって左右されるものではありません。神様は、この時代にも聖霊を与え、一人ひとりを、キリストの証人として生かそうとしておられるのです。

そうであるなら、逆に、私たちの側に問われていることがあります。それは、「私は、その聖霊に導かれて歩もうとしているだろうか」ということです。

神様の願いが、自分自身の願いへと変えられていくということは、同時に、これまで自分が握りしめてきた人生の主導権を、神様へと明け渡していくということでもあります。何を望むか、何を選ぶか、その舵を握ってきたのは、これまで自分自身でした。しかし、聖霊に導かれるとは、その

舵を神様の手に委ねていくことなのです。そして、その舵を手放すことは、決して痛みのないことではありません。時に、それは厳しい現実を伴います。

私たちが聖霊のご支配に自分自身を明け渡し、聖霊が私たちのうちに臨むとき、神様が喜ばれないこと、不快に思っておられることが、私たちの生活の中に、一つひとつ示されるようになります。それがどのような形で現れるかは人それぞれですが、はっきりと言えることは、今日、アンテ・イオキア教会の人々が弟子へと変えられていったように、みことばの中に御霊が働かれ、聞く私たちにそれを示してくださるということです。聖霊を迎え入れ、聖霊に導かれるとき、神様は私たちの人生に介入され、主のものとして私たちを生かすために、さまざまなことに気づかせ、変えようとされます。この変化には、痛みが伴います。なぜなら、変えられようとしているものの多くは、私たちが長年抱え込み、ある意味で自分に一体化させ、手放したくないと思っているものだからです。そこから離れる道には、大きな痛みがあります。「どうしてこんなことが」と思うような出来事が、私たちの人生にも起こってくるのです。

しかし、これは私たちを苦しめるためのものではありません。私たちをキリストのものへと造り変えるための、良い過程なのです。そして、この訓練の場所は、何も特別な場所ではありません。私たちの日常生活そのものです。

特に、日常生活の中でこのことがよく現れるのは、物事が自分の思い通りにならなかった時だと思います。計画していた通りにならない。願っていた結果にならない。思っていた道が閉ざされる。そのような時、私たちは「なぜこんなことになったのか」「どうして神様はこうされたのか」と、不平や不満に満たされることがあります。しかし、ここでこそ、私たちは御霊に導かれる信仰的な姿勢を身につけていくことができるのです。それは、「ここにも神の主権がある」と認めることです。もちろん、起きた出来事のすべてを「神様が私にこうしなさいと命じられた」と単純に解釈するわけではありません。しかし少なくとも、私たちの人生に起きる現実、神様の御手の外で起きているのではないのです。

ですから、自分の思い通りにならなかったときに、「神様がこの現実を私の前に置かれた。この道の中にも神様の御手がある。では、この状況の中で私はどう生きればよいのだろうか」と、自分自身を神様の主権の下に置いていく。そこに、聖霊に導かれて生きるための訓練があるのです。

これは、決して受け身になって何もしないということではありません。むしろ逆です。自分の思い通りにならない現実を受け止めた上で、「では、この場所で自分にできることを精一杯しよう」と歩いていく。自分が主人ではない、神様が主人である。そのことを、日々の現実の中で認めていくのです。その只中で語られる神様のか細い声に耳を傾け、自分の思いではなく神の御心に従う時、私たちは結果として、想像もできないような喜びと平安に満たされます。

私たちは、これを知っているのではないのでしょうか。今までこれを体験したことがあるのではないのでしょうか。そして、これを今もなお、求めているのではないのでしょうか。自分ではどうすることもできなかった、変えることもできなかったどうしようもない自分を、神様を変えてくださる。決して自分では気づくことのできなかった心の片隅までも、造り変えてくださる。

玉ねぎの皮を一枚一枚剥いていくように、私たちの心の内側を剥いていかれるとき、私たちの心にこのような願いがあるならば幸いです。「主よ、お救いください。良くなりたいたいです。」

周りから見れば、それは決して順調な人生には見えないかもしれません。喜ばしい出来事にも見えないかもしれません。しかし、不思議なのです。その喜ばしいとは言えない出来事の只中を通りながら、変えられ、大いに喜んで生きている人々が、確かにいるのです。その姿を見た人々は驚きます。そして、その驚きの中で、人々はこう言うのです。「あの人、クリスチャンなんだって。」

ただそこに、自然とキリストの御名が輝くのです。

お祈りいたします。